

「消化器病マニュアル」

Manual of Gastroenterology—Diagnosis and Therapy

Gregory L. Eastwood & Canan Avunduk

竹 内 正 監訳

山口大学名誉教授

竹 本 忠 良

文化人類学の山口昌男教授の著書『気配の時代』（筑摩書房，1990）に、「飛びきり新しくやろうとしたらとてつもなく古くなるものだ」という題の短文がある。「……ロック，聞きかじりのポスト構造主義，それプラス遺伝子工学，この3つの部分から成るサイボーグ」が新人類であると同教授は言う。

その新人類がわれわれの仲間になくなったいま，いかにもタイプの古い日本人としての発想を文章に残すことはいささか気が滅入るのであるが，この本『消化器病マニュアル』を手にしての感想を正直に述べておこう。

原著者の Gregory L. Eastwood 教授は，ここ数年間，日本で開催されている International Symposium on Gastroenterology を企画し采配を振るうため来日しているし，本年10月には私がジョージア医科大学の客員教授として彼の大学で講演させられるという間柄である。そして，監訳者の竹内正教授はいっしょに東京女子医科大学消化器内科でな

がい間勉強した同僚であり畏友である。こうして，私の友人の2人の共同作業の成果である『消化器病マニュアル』の書評をすること自体を，いかにも日本人らしく，奇縁だと思った次第である。しかし，書評は書評である。同じ仲間のもたれあいであってはならないと信じている私としては，ひときわ目を鋭くしたつもりである。

それでも，うまくできあがっている本だな，こんなに簡潔に膨大な消化器病学の診断と治療の知識をコンパクトに凝縮できることはすごい頭脳だとすっかり感心させられてしまった。そのうえ，コンパクトな本でありながら，読み通しても文章が退屈しないし，内容がギョウギョウつまっている感じがしない。いまはやりのCD(compact disc)の名盤を聴いているような気分で，この種の本が読めることは驚きですらあった。

その理由として，私の読書傾向が雑誌やモノグラフ中心主義で，ながい間マニュアル的な本を読んでないことも考えたわけであるが，この種

のすぐれた解説書でもって，自分の知識の偏重をつねに，修正する作業の重要なことを，このたびあらためて教えられたのである。それにしても，訳文も読みやすい。おそらく監訳者としての苦心も大きかったと想像するが，Eastwood 学長と竹内教授の鋭敏で緻密な頭脳の生んだ好訳書である。

と，ありきたりのことを書いたが，ペンを握ったとき，すでに監訳者序文のきびきびとした簡潔な文章に一言つけ加えることは至難のわざであると覚悟し，あっさり胃を脱いでいたのである。

この種のマニュアル的な本の執筆と訳業を，とかく軽くみる日本の風土であるが，それは「怠け者の論理」（アエルゴス・ロゴス）の変種にすぎないと思い知ったわけで，Eastwood 教授が Bockus の Gastroenterology 級の本が書けるほどの勉強家であり，臨床の問題を熟知したうえで基礎研究の最先端を着実に歩んでいるひとであるからこそ，この本ができたのだと痛感しているのである。

ふたたび，日本流に言えば，「押し寿司」や「箱庭」あるいは「盆栽」も名人がつくればこんなにも違うのかと，ここに質の差をみるのである。

A5 変型判 434 頁 1990 年 定価 5,974 円(税込)

メディカル・サイエンス・インターナショナル 刊